桜美林大学　大学教育開発センター
Newsletter
No.09
J.F.Oberlin Faculty Development Center Newsletter
2014年7月3日

Contents ▶
1 学内シンポジウム(2014.2.13)の概要報告　2 大道卓教授発表要旨　3 桑名義晴教授発表要旨　4 茂木俊彦特任教授発表要旨　5 髙瀬久男准教授発表要旨　6 松田麻利子教授発表要旨　7 シンポジウムを終えて　8 次回シンポジウムのご案内

1　学内シンポジウム(2014.2.13)の概要報告

さる2月13日に大学教育開発センター主催の学内シンポジウム「桜美林大学の教育―現状と課題―より良い教育を目指して、われわれは今何をすべきか―」を開催しました。今回のシンポジウムは、異なる教育組織に属する本学の先生方による議論を踏まえて本学の教育の現状と課題について率直に語り合い、改善方策について認識を共有することにより桜美林大学としてのより良い教育づくりを目指したいと考えました。

パネリストは大道卓教授（リベラルアーツ学群）、桑名義晴教授（ビジネスマネジメント学群）、茂木俊彦特任教授（健康福祉学群）、髙瀬久男准教授（芸術文化学群）、松田麻利子教授（基盤教育院長）の先生方にお願いしました。（肩書きは開催時のものです。）

2　大道卓教授発表要旨：学生に見られる傾向とこれからの教育

リベラルアーツ学群　教授　大道　卓

最近の本学の学生に見られる質の低下は顕著である。計算能力や文章力が不足し、指示待ち傾向が強く、無思考、無意欲等行動を起こさない学生が増加している現象は、多くの教員が認識しているものである。この現状を目の前にして我々がなすべき事項についていくつかの提案をしたい。

学生の傾向に見られる3つの問題点を指摘したい。1つめはMajor/Minor登録状況に見られる問題である。①特定のMajorに集中する、②Minor選択が35%～50%と低い，③ダブルMajorは2～3%しかいないという問題点がある。Independent Learnerを目指したカリキュラム設計であったが、”独立”した思考をせずに”学ぶ”意欲が低い傾向を認めざるを得ない。2番目は安易な科目履修の実態である。学生はいわゆる「楽勝科目」を履修する。そのための情報入手には長けており、先輩や友人さらに「みんなのキャンパス」等に情報を求める。また、履修単位数も必要最低限しか修得しない。昨年度の卒業生の修得単位数分布では、130単位以下が55%も見られ、146単位以上学んだ学生は1割しかいなかった。3番目の問題点はアルバイトである。昨年秋に本学の学生300名に対して実態調査を行った。その結果によると、①本学の学生は全国平均（生協調べ）の約2.5倍勤務している、②学年、性別の差はあまりない、③アルバイトの目的は生活費もあるが、衣類、趣味、交際費が多い、④アルバイト時間の長い学生はGPAが低い等が判明した。

以上の観点から、本学の最近の学生は以前に比べて、学力も低く、大学で学ぶ意欲・意識が低くなっていることを認めなくてはいけない。

このような現状を考えた場合、本学の教育はどうあるべきであるのか。まずは、学生の現状を受け入れることが必要である。本学の学生の特性を考慮した場合、①褒められた経験が無いので、がんばったら褒める、②素直で指示待ちの学生が多いので、適切な指示を与える、③回答待ちの学生が多いので、以前の学生の成果・サンプルを提示する等の教育上の工夫が必要になってくる。また、対策としては、このような学生を考慮したカリキュラム改革が急務であり、それと同時に個々の授業の改善に全学的に取り組む体制を構築することが必要になってきている。

3 桑名義晴教授発表要旨：ビジネスマネジメント学群の教育の現状と課題

ビジネスマネジメント学群　教授　桑名　義晴

ビジネスマネジメント（以下、ＢＭと略称）学群の教育の現状と課題について、私見を簡単に述べたい。

まず、ＢＭ学群はビジネスの専門知識を習得し、国際舞台で活躍するビジネスのプロフェッショナルを育成することを教育目標にしている。ＢＭ学群の教育カリキュラムは、この目標を実現するために編成されている。学生は入学してから卒業するまでに基礎教育科目、専攻（専門応用）科目、実習系科目を学習する。とくに、一昨年度より専攻（専門応用）科目群はビジネス系プログラムとマネジメント系プログラムに区分され、学生は自分の将来の進路を見据えたうえで、ビジネスやマネジメントの知識や能力を身につけるようガイドラインが提示されている。その意味では、このカリキュラム編成はビジネスのプロフェッショナルを育成するには理想的なものになっているといっても過言ではない。

しかし学生は、その教育目標を達成するようなレベルの学力を身につけているのかというと、はなはだ疑問である。多くの学生の学力は、その目標とはほど遠いのが現状ではないだろうか。

確かに、ＢＭの学生は実務面への関心が高く、ビジネスに対する感覚的な視点には優れたものを持っているが、物事を論理的に思考したり、それを客観的に深く掘り下げて分析する能力には欠けているように思われる。多くの学生は、表面の現象のみに心を奪われ、それを追いかけることに熱心である。ＢＭ学群の教育カリキュラムは、ビジネスマネジメントの理論と実践の両面に関する知識や能力を習得するようになっているが、学生の関心は実践面に偏っているように思われる。将来において、真に国際的に活躍するビジネスのプロフェッショナルを目指すなら、この偏寄りを是正し、学生が地味な理論の学習にも関心を寄せる教育が必要になろう。それには教育する側の教育・指導方法の改善も必要になるのは言うまでもない。

4 茂木俊彦特任教授発表要旨：潜在する学習要求を大切にする教育を

健康福祉学群　特任教授　茂木　俊彦

1. 学生の多くは、「学びたい」という潜在的要求をもっている

教師が上から学生を眺めまわすことで得る学生に関するイメージは、学習意欲がなく、人格的にも未成熟で、アルバイトに必要以上に精を出す、というものであろう。このイメージをいかにして払拭するかが、まずは問題である。指導によって学生は、問題を自分なりに把握でき、表現でき、他者に伝えることができたという喜び、自信、もっと勉強したいという意欲の高まりを見せる。われわれは学生にある潜在的な学習要求に気づき、学力を形成し、人格的なものの発達を促す必要がある。

学生は、アルバイトやボランティア活動を通じて、他者に信頼され、役割を与えられ、活動を評価されて、自己を確認して行っている例が少なくない。それが高じると負担が重くなり、心身の不調に陥る例もあるが、私たちはここにも、学生の深いところでの願い、秘めたエネルギーを見出すことができるのではないか。

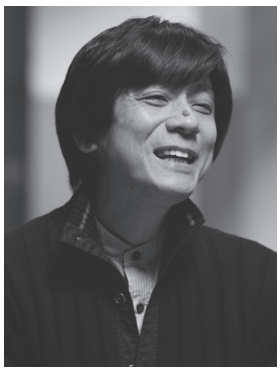
2. プロフェッショナル養成と教養の関係を問い直す

私が属する学群にそくして考える。「健康福祉学」という学問と教育の領域は、どのようなディシプリンによって成り立ち、発展させられるのかということについて、やや長期見通しに立って考えていく必要がある。同時に、今後において必要となるのはプロフェッショナル養成の見地から見た、教養のあり方の検討であろうと思う。例えば基盤教育院における初年次教育カリキュラムと学群の教育カリキュラムの有機的な連携について十分に検討されているのかどうか、おぼつかない。

「プロフェッショナルとしての教養」は、現場におけるキャリアの蓄積過程でさらに深められ高度化されていくはずであるが、大学においてはその基礎となるような教養の中身は何かを問う必要がある。また、ここから逆照射していった場合に見えてくる初年次教育の「教養」の中身と質・水準はどのようなものであるのかが検討課題である。

5 髙瀬久男准教授発表要旨：
より良い教育を目指す上で、考えるべき問題点と、それに伴う解決策のために

芸術文化学群演劇専修　准教授　髙瀬　久男



このシンポジウムにおける、私の発表の要点は、いかに演劇教育を充実させるかということです。

演劇を含めて芸術というものは、人気があるようでありながら、表面の派手さ、面白さにばかり目が行きがちで、本当のところ、なにが表現のポイントなのか、何故この世に芸術が存在するのかなど、その本質のところについては、どうも興味の対象外となってしまいがちです。そこで問題点は、演劇について言えば、その存在意義に関しての興味や理解が薄いこと。将来に向けてのデッサンがなかなか描きにくいということ。授業においては少人数でこそ生きることが、人数が多いゆえに集中した授業が難しく、特に実技においては個人を大切にする授業の実現に苦慮しているということです。解決に向けては、まず一つの授業の学生の人数を減らしていくこと。それから教師と学生がしっかりコミュニケーションをとれる授業の実現を目指すこと。そして一般教養としての芸術教育を丁寧に行っていくことなどが必要であると考えます。大学の演劇教育は、まだ未開発の部分が多く、劇場を教育に有効に使える桜美林大学は、これからこの分野のパイオニアとなる可能性が十分にあると考えています。

この世には表の世界と裏の世界があり、演劇を含めた芸術は裏の世界に属するように思います。表は私たちが普段仕事や学校など、あるルールに則って生きる社会のこと。裏は表では表すことの出来ない心に触れるエリアのことです。人は裏の支えがあってこそ、はじめて表で生きていけるのだと思います。そのことを大切に考えていきたいと思います。

6 松田麻利子教授発表要旨：基盤教育の現状と課題

基盤教育院　教授　松田麻利子

基盤教育院の役割は、その英語名cornerstone　が示す通り、学群を問わず大学での学びの礎石となるスキル中心のコア科目を提供し初年次教育を行うだけでなく、建学の精神や教育理念を体現する事を通じて、よき市民となるための礎石作りを大学生活の全期間を通じて行う事でもあると考えている。

基盤教育院は、全学生に対して授業を提供できる一方、学生を持たないために、必修科目以外の選択科目の存在や意味をアピールする機会が少ないという弱点をもつ。そして必修のコア科目とそれ以外の選択科目では、抱える問題もそれぞれ異なってくる。全学必修科目では、近年の基礎学力低下の影響が顕著で、学習意欲の欠如が問題になっている。また、学習障がいや心の問題により対人関係に苦手意識を持つ学生が増加し、英語コアや口語表現など、人との関わりを授業の主眼とするような科目に困難を抱える学生が増え、様々な対応が必要となっている。

一方、選択科目ではこの2年ほど履修者減が目立つ。要因としては、卒業要件124単位を満たせばよしとする学生の増加、加えて学群によってはカリキュラムの自由学習枠が減少したことも響いていると思われる。またGPA低下により履修単位数が抑えられて単位取得が遅れる事への警戒感から、難しい授業を避けようとする傾向もあるのではと推測される。これはGPAによる履修単位数制限のマイナス面と言えるのではないだろうか。

対策としては今年から、突出した英語力を持つ少数の学生を徹底的に伸ばす、いわば頂点を引き上げる「英語パスポートコース」をスタートさせた。一方で算数の基礎を理解する機会を逸してきた多くの学生に数の基本概念を身につけさせる、底上げのための授業も始めた。併せて英語では、個々のレベルにあったクラスを履修させて学習効果を上げるための履修制度改革も行っている。また自由選択科目はまず存在を学生に知ってもらう必要がある。外国語科目、サービスラーニング科目など本学の特徴として外に発信できる科目でもあり、周知に努めたい。

7　シンポジウムを終えて

基盤教育院教育と学群教育との有機的結合の再検討、他大学には無いユニークな制度のブラッシュアップ、ホームライクスクールという良き伝統の維持、そして学生の質の変化にどのように対応していかなければならないのか、気づきの多かったシンポジウムとなりました。

当日の会場風景

三谷学長

8　次回シンポジウムのご案内

大学教育開発センター　学内シンポジウム

大学ガバナンス改革と戦略経営の構築 ー私大改革事例も参考にー

日　時 2014年7月16日（水）13：00～15：00　会　場 桜美林大学町田キャンパス　崇貞館6階　H会議室

講　師 篠田 道夫（大学アドミニストレーション研究科／心理・教育学系 教授）

中教審・組織運営部会が、昨年末、審議のまとめを発表、学校教育法の改正案が示され、先日の国会で可決成立し、いよいよガバナンス改革が最重要なテーマになってきました。

私大の改革を前進させるには、目標を鮮明にした経営・教学一体の運営システム、戦略経営の構築が不可欠です。それを如何にしてつくるか？

全国の大学の中から、優れた改革事例を紹介し、経営改革、教学改革の在り方、今後の方向性を考えます。

講師略歴：1950年、長野県生まれ。愛知大学法経学部卒業。1972年日本福祉大学職員採用。広報課長、庶務課長、総務部長、事務局長を務める。1997年より16年間学校法人日本福祉大学理事を務める。2012年より桜美林大学大学院教授。日本私立大学協会附置私学高等教育研究所研究員「私大マネジメント改革」チーム研究代表。中央教育審議会大学教育部会委員等を歴任、現在、文部科学省学校法人運営調査委員。
著書に、『大学マネジメント改革ー改革の現場・ミドルのリーダーシップ』（ぎょうせい、2014年）などがある。

申込方法：件名を「学内シンポジウム申込」とし、氏名・所属組織を明記して大学教育開発センター（fdcenter@obirin.ac.jp）までメールにてお申し込み下さい。なお、〆切は7月11日（金）とさせていただきますので、お早目にお申し込み下さい。

問合せ：桜美林大学 大学教育開発センター TEL:042-797-6724（内線3250）

速　報 FDに関する公開シンポジウム開催

日　時 2014年9月16日（火）15:00～17:00　会　場 桜美林大学町田キャンパス　明々館　A408

講　師 創価大学　関田 一彦教授（教育・学習支援センター長）　テーマ 学習支援と授業改善について（仮題）

編集発行：桜美林大学 大学教育開発センター
〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758　桜美林大学 其中館1階 101　TEL.042-797-6724（内3250）　FAX.042-797-6398
E-mail：fdcenter@obirin.ac.jp　Web：http://www.obirin.ac.jp/ri/fdcenter/